

## 目次

1. [巻頭言](#)「第7回研究大会を終えて」  
実用英語教育学会会長 釣 晴彦（札幌学院大学人文学部 教授）
2. [ニュースレターVol.6 No.2](#)（研究大会特集号）について
3. [第6回研究会について](#)  
ビジョン5-16：外国語教育におけるアクティブラーニング—演劇的手法を活かして—

[研究発表 1](#)

中元 徳寿、宮越 哲史（北海道札幌英藍高等学校）  
「パフォーマンス課題作成の視点」

[研究発表 2](#)

原田 晋（北海道札幌東陵高等学校）  
「高校演劇脚本の英訳と授業での活用」

[研究発表 3](#)

久野 寛之（札幌大谷大学）  
「教科書の《ドラマ化》による学習者の発話の活性化と、その成功を支えるアクティブラーニングの手法」

[ワークショップ](#)

「国語教育と英語教育を結ぶドラマとストーリーの力(ちから)  
—子どもたちが平田オリザ・高橋美鈴・関根勝治とともに学ぶアクティブラーニング」  
前半：アクティブラーニング『Owl Stories』プロジェクト報告  
後半：ミニワークショップ—平田オリザ氏の高校生向けワークショップの手法と英語教育への応用

4. [第7回研究大会について](#)  
ビジョン5-16：英語教育と地域貢献—地域のグローバル化と英語・外国語教育—

[研究発表 1](#)

石川 希美（札幌大谷大学）  
「大学生のボランティア活動における英語使用事例」

## 研究発表 2

山崎 秀樹（北海道千歳高等学校）

「地域との連携によるプロジェクト型英語教育の実践—高等学校『時事英語』の教材開発と発信活動—」

## 研究発表 3

櫻田 一平（石狩市立聚富小中学校）

「地域と世界をつなぐ架け橋に～公・民連携で広がる可能性～」

## 講 演

木村 眞司（札幌医科大学）

「これからの英語教育—趣味が本職となった医師の目から—」

## 実用英語教育フォーラム

「アクティブラーニングとしてのプロジェクト学習の可能性—SPELT 主催で小中高大の一大連携プロジェクトを企画する—」

プロジェクト提案者：釣 晴彦（札幌学院大学）

パネリスト：木村 眞司、櫻田 一平、山崎 秀樹、石川 希美

司 会：久野 寛之（札幌大谷大学）

## 5. シリーズ「小学校からはじまる実用英語教育」

「ほめる・頼む・感謝する・同情する(3)——同情する」

久野 寛之（札幌大谷大学 教授）

## 6. お知らせ

## 巻頭言

### 実用英語教育学会 第7回研究大会を終えて

実用英語教育学会会長 釣 晴彦  
札幌学院大学人文学部 教授

実用英語教育学会第7回研究会を終えて、一言ご挨拶申し上げます。

研究大会テーマは、「英語教育と地域貢献—地域のグローバル化と英語・外国語教育—」です。

最初は石川希美先生（札幌大谷大学）が「大学生のボランティア活動における英語使用事例」として発表されました。2017年2月に開催された冬季アジア札幌大会で一般ボランティア活動として参加した学生2名の事例を中心に上げ、学生がどのような状況で英語を使用したか、またどのようなコミュニケーションがあったかを紹介しました。

次の発表は、山崎秀樹先生（千歳高等学校）が「地域との連携によるプロジェクト型英語教育の実践—高等学校「時事英語」の教材開発と発信活動—」として、千歳高等学校国際教養科の専門科目「時事英語」において、Project-Based Learning(PBL)として行った「千歳バーガープロジェクト」の実践を、地域との協働プロジェクトを通してどのように生徒が活動したかを詳細に報告しました。

3人目は櫻田一平先生（石狩市立聚富小中学校）の「地域と世界をつなぐ架け橋に～公・民連携で広がる可能性～」として、石狩市の聚富に住む中学生が、地域や地元企業についての学習を行い、外国人に向けて地域をPRする活動報告でした。

講演は木村眞司先生（札幌医科大学）が「これからの英語教育—趣味が本職となった医師の目から—」として、医者ではなくて英語の先生としての立場から、語ってくれました。

木村先生は、日本プライマリ・ケア連合学会副理事長でもあります。そして今、医療従事者の第二言語リテラシーを向上させることを目標にして仕事をなさっています。「文章を読解することに学生は飽き飽きしている。モチベーションを保つ、

持たせることが大事であり、仕事に直結した英語が大切なんじゃないか」と、私達にとって英語学習をする原点の課題を突きつけた講演でした。

3人の発表と木村先生の講演内容には、第二言語習得論の目指す発展段階にある CLIL「内容と言語統合学習」(Content and Language Integrated Learning)に共通するものがあると考えました。

実用英語教育フォーラムは、アクティブラーニングとしてのプロジェクト学習の可能性として SPELT 主催で小中高大の一大連携プロジェクトを企画するというテーマで、筆者が提案者になり、司会を久野寛之先生、パネリストに木村眞司先生、櫻田一平先生、山崎秀樹先生、石川希美先生で行いました。昨年秋の第6回研究会のテーマ「アクティブラーニング」を発展的に引き継ぎ、小中高大の連携プロジェクトとして具体化するとすれば、一体どんなプロジェクトを考えることができるのだろうか、意見交換がなされました。なかなか統一見解までには至りませんでした。 “Think globally and act locally in English.”の視点で、方法や場所をターゲットして実践を始めてみようという意志確認をして終わりました。

2018年4月から前倒して小学校外国語活動の試行が始まります。今や日本の教育がグローバル人材育成を目指した政策で進んでいますが、世界の動向を眺めれば、グローバリゼーションとは逆の方向に動きだしているようです。

しかし、実用英語教育学会は、小中高大との英語学習・英語教育における教員の連携をミッション（社会的使命）として活動を続け、活動を広く共有出来る方々と、手法をさらにシェアして共に学んで歩んで行きたいと考えております。

今後とも一層のご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## ニューズレター Vol.6, No.2 について

2017年10月28日に第6回研究会を、2018年2月4日には第7回研究大会を札幌大谷大学セレスター札幌キャンパス講義室にて開催いたしました。本号のニューズレターは、第6回研究会と第7回研究大会の合本号となります。巻頭言につきましては、「第7回研究大会を終えて」と題して掲載させていただくことをご了承いただきますようお願い申し上げます。

### 第6回研究会について

## 研究発表1

### 「パフォーマンス課題作成の視点」

北海道札幌英藍高等学校 教諭 中元 徳寿 宮越 哲史

本発表は、コミュニケーション英語Ⅱの授業において、共通して行っている単元末のパフォーマンステストの課題提示を工夫することで、新学習指導要領における3つの柱のうち、生徒の「学びに向かう力を高め、人間性を涵養する」ことを目的とした実践の概要と検証結果、及び成果と課題を示したものである。

本校生徒の実態を基に、上記の目的を達成するため、(1)ESDの視点から「教科書の内容に関連した、地域に対する愛着を問うテーマ(「北海道ならではの」課題)」を、(2)既習事項活用の観点から「発表原稿に、その単元で学習した文法事項を用いた文を入れて作成させる」の2点を工夫し、授業を実施した。

生徒によるパフォーマンス(プレゼンテーションテスト)は、教師および生徒自身により、評価ルーブリックを用いて点数化した。課題提示の工夫の前後で、それぞれの数値を対応のあるt検定において比較した。また、単元ごとに振り返りシートを用いて、生徒自身に学習の気づきや変化について記述させた。

その結果、教師評価においては、文法の知識、

発表時の発音や自信のスコアが有意に向上したことがわかった。また、生徒の自己評価では、自身のトピックの興味深さや発音の流暢さ等、内容に関するいくつかの項目において有意差がみられた。生徒の振り返りシートからは、自身の学習態度の変化、自分の意見を持つことの大切さ、自分の住環境についての知識が乏しいことなどへの気づきなどが観察された。

以上のことから、地域を題材に設定したり、既習事項を活用して作文するなどの具体的な指示を出して作文させたりすることは、生徒が英語学習を「自分ごと」として捉え、自分の将来と関連させながら学びに向かう力を高める一助となる可能性があると考えられる。また、ひいてはそのような学習態度が、北海道を支えていく人材としての意識の涵養につながっていくと願っている。今後は、実際に取り組んだ「札幌オリンピック学生アイデアコンテスト」のように、実社会とリンクした活動を仕組むとともに、生徒の英語の精度を高めていくよう、引き続き授業の省察と改善を重ねていきたい。

## 研究発表2

### 「高校演劇脚本の英訳と授業での活用」

北海道札幌東陵高等学校 教諭 原田 晋

演劇は単なる言葉のやりとりではなく、心身全体を使ったところのやりとりです。英語学習において「暗記」を超えて「表現」にまで至らず一つの方法に演劇の脚本を使った授業を考えることができるかもしれないと考えました。

英語を使う喜びが英語で表現する喜びと結びつく時、英語学習もまた、こころとからだをひっくりめたダイナミックな営みとなるのではないか。そこでは、言葉（英語）はみずみずしく、生き生きとしている。「英語で話す」ことの原点はそこのあるような気がしました。このような思いを授業の中で手探りし、実践していくことができないかと

考えました。そこで、「恐竜レター」（高校演劇）を翻訳し、授業で活用してみました。活用にあたっては、オレンカ・ビラッシュの「B-slim」を適用しました。

実際の授業では、生徒たちがいきいきと楽しく英語で表現する場面が多く見受けられました。授業について生徒たちが書いたアンケートの記述を読んでも、高校演劇の脚本の英訳を使ったことは英語を楽しみながら能動的に学ぶことにつながったようです。また、多くの生徒が英語で話すことにも積極的にになりました。

## 研究発表3

### 「教科書の《ドラマ化》による学習者の発話の活性化と、その成功を支えるアクティブラーニングの手法」

札幌大谷大学 教授 久野 寛之

TOEIC のリスニングスコア（2005～2013）や EF EPI（EF English Proficiency Index）の 2016 年度データを見ると英語力（リスニングとリーディング）が伸びていない。S&W は推して知るべし。その原因は、(1)「学習 vs. 習得」問題（習得を促す要素が圧倒的に足りない）と、(2)「自分視点 vs. 他者視点；主観化 vs. 客体化/コト化」問題（自分の視点から、自分のことを話す機会が圧倒的に足りない）の 2 つにあるという仮説を立てた。

英語を使う（skill-using）活動をさせていても、子どもたちが《自分》から距離のありすぎる話題や場面で英語を使っているため、学習（“learning”）の域を出ず、習得（“acquisition”）

が生じていないのではないか。実際、ある中学の教科書（中 1～中 3）を分析すると、①自分に馴染みがあること、②自分が現にできること、③自分が関わる可能性がありそうな話題は、中 1 でも 7 割程度しかない。《自分》のことを十分に話させていないという意味で、日本の英語教育は未だに意味優先より構造優先の性格が強いと言えるのではないか。

この問題は、学習者が自分のことや自分の考えを言う機会を飛躍的に増やすことによって解決できるはずだが、それを、予め決められたシラバス（学習指導要領と、その枠内で編集された教科書の学習項目）の枠内で行うためには、「主体的で対話的な深い学び」を生み出す所謂

アクティブラーニングが最適のアプローチになるという仮説を立て、以下のような実践例を提案し、発表者の授業でそれらを部分的に実践した結果を報告した。

(1) ホットシーティングの手法(目黒学院中学・高等学校の藤巻 朗先生の実践する演劇的手法※)：教科書の文章を読んで、内容と関連する人物になりきって、他の生徒が用意してくる様々な質問に答えさせる活動。

(2) 教科書の会話を演劇作品(文学的テキスト)として分析させる。登場人物の気持ちを考えさせ、その気持ちがわかるような英語音読をさせたり、似たようなスキットを創造させる。

(3) 都立両国高等学校附属中学校布村奈緒子先生方式のラウンドロビンによる授業※

以上の実践が英語力の変化を起こしたかどうかについてのデータは集められなかったが、アンケート調査では、(1) 中低位層にはこれらの活動を日本語を使って行うことが好まれ、(2) 会話科目では9割、リーディング中心の科目では9割超の学生がアクティブラーニングの形式をより好ましい授業形態だと感じたということが分かった。

※注 藤巻先生、布村先生の実践例はともに株式会社 Find アクティブラーナーのウェブサイト (<https://find-activelearning.com/>) のビデオ資源から、それぞれ2017年2月、5月に取得した。

## 第6回研究会 <特別講演・ワークショップ>

### 国語教育と英語教育を結ぶドラマとストーリーの力——子どもたちが 平田オリザ・高橋美鈴・関根勝治とともに学ぶアクティブラーニング

ワークショップリーダー 札幌学院大学 教授 釣 晴彦

2部に分けて行われた。第1部では、室蘭在住の絵本作者関根勝治氏の作品『賢梟人物戯画「ホロホロ日記」』を高橋美鈴氏が朗読し、さらにそれを大学生が英・仏・中・タイの4か国語で翻訳、音声化するという多言語DVD絵本プロジェクトを通して実現したユニークなアクティブラーニングの実践について、学びに直接関わった学生からの報告を中心に、原作者関根氏からのコメントも交えて報告が行われた。第2部では、釣先生が案内役となり、平田オリザ氏が行った高校生向けワークショップのビデオを見ながら、演劇を用いた表現教育、コミュニケーション教育について参加者とともに考えた。

#### 前半(15:00-15:40)

アクティブ・ラーニングとしてのプロジェクトに参加した学生からの発表

発表題：「絵本動画を通して学ぶコミュニケーション」

概要：2015年度・2016年度の2年間にわたり、教養ゼミナール「英語で表現しよう」で釣先生と佐藤ケイト先生のチームティーチングによる絵本動画を製作するゼミが開講された。本ゼミナールには教員と学生に加え、プロの画家や音声スタッフが参加した。2015年度のゼミでは、画家である関根勝治さんが制作した『賢梟人物戯画：ホロホロ日記』という絵本を英・仏・中・タイの4か国語に翻訳、音声化、その朗読の録音に挑戦した。その後、絵本の原画と録音された音声、梟や風などの効果音、字幕を合わせ絵本の動画を制作。また、授業外でNHKアナウンサーの高橋美鈴さんを本学に招き、日本語で絵本の録音を行った。2016年度のゼミでは、前年度と同様に絵本の録音から動画制作まで行われたが、学生自身が絵本のストーリーを考え、そのストーリーをもとに絵を制作したことが前年度と異なる点である。7か国語版と



なり、動画絵本『Owl Stories』として制作した。本ゼミナールでは学生が自ら考えて創作することで創造性や主体性が養われ、グループで考えてより良いものを作るために必要な協調性や協働性が養われた。特に、2016年度のゼミでは学生が4グループに分かれて、それぞれのグループごとに絵本を制作したため、前年度よりも創造性や協調性が必要とされた。学生は何か1つ自分で創り上げることで得られる達成感を味わい、また、他者とのコミュニケーションを図ることの難しさを実感した。ここで筆者はコミュニケーションで最も重要なことは「傾聴」、つまり、相手の話にじっくり耳を傾けることであると考えた。

札幌学院大学 英米文学科4年生 中井 俊

## 後半 (15:45-16:25)

「平田オリザの高校生向けワークショップのビデオを通してコミュニケーション教育のあり方を考えるワークショップ」

概要： 2017年3月に千歳市で開催された平田オリザ氏の講演会「コミュニケーションと対話能力における表現教育の役割と表現教育のひろがり～自己再発見と生きること、そして演劇によるまちづくり」の一部として行われた平田オリザ氏の高校生向けワークショップと自作台本を用いて、実際に高校生を指導している姿をビデオにて見て頂いた。

平田オリザ氏の表現手法は、役者等に特化したものではなく、価値観の異なる他者との交流・共存のためのコミュニケーションを目指している。今回、平田オリザ氏の演劇を用いた表現教育の実践例を通して、国語教育と英語教育をつなぐストーリーの力、演劇の魅力と活力が、今求められているアクティブラーニングの実現形としてどのような可能性を持っているかということをごさんと共有した。平田オリザ氏が3時間近く15名の高校生に対して行ってくれたワークショップは、誰もが経験しても参考になる内容であった。それは、ある場面や状況の人間関係で使用する言葉は、文化や国によって認識のズレがあり、そのズレに気が付き、認識して調整していく能力が必要であるということだった。普段は私達も、その

ような他者との認識のズレに気が付き、調整して合意形成をしていく活動が多くはない。言語や文化の多様性は「コミュニケーションの障壁」であるかも知れない。その障壁を如何に減らしていくかは教育の大事な使命だと考える。

平田オリザ氏の講演は、参加した皆さんが納得できるとても説得力のある内容だった。学会の事務局長である久野先生が、このことに関して次の様に書かれている。「EGL (English as a global language) というよりも、EGC (English for global communication) がこれからの実用英語の最高目標とならなくちゃいけないとも思いました。」

(平田オリザのワークショップ台本)

\*自動車の中、AとBが向かい合って座っている。

A (男) それがね、子どもの頃のことで覚えてるのは火事のことだけなんだな。

B (女) え？

A 夜中に火事になったの、家が。

B ああ、え？

A それが、原因が、どうも、たき火の火の粉が飛んできて、それが枯れ草に燃え移ったらしいのね。

B 怖いねえ。

A うん。それをなんか、覚えてんだ。すごい怖かった。

\*C (女) 登場。

B 地震より怖かった、こないだの？

A ああ、あのときは、寝てたから。

B ああ、前にも聞いたっけ。

A うん。

C あの、ここ、よろしいですか。

\*Bの隣の席を指す。

B ああ、どうぞ、

A ★こっち来たら。

B ああ、(腰をうかす。)

C いえ、ここで、(座る。)

B そうですか。(元の椅子に座る。)

C すいません。(雑誌をひろげて読み始める)

B いえいえ、・・・・

A さっき、トンネルに入るとき、外見て  
たら、こうもりがいたよ。

B えー、

A 教えてあげようかと思ったけど、寝て  
たから。

B ああ、なんだ。

A うん。・・・・・・・・

A 旅行ですか？

C ええ、まあ、

A ああ・・・私たちも、旅行なんですよ。

C ああ、

A どちらまで？

C いえ、まあ、何となく、こっちの方を  
まわってみようかと思って、

A ああ、いいですねえ・・・、  
\*三人とも、何がいいのかよく判らない。

C ええ、

B 食べません？（みかんを差し出す。）

C いえ、どうも。

B おいしいですよ、意外と、

C あ、いえ結構です。

B ああ。（みかんを引っ込める）

C あの、どちらまでいらっしゃるんです  
か？

A いえ、あの、私たちは、何にもないん  
です。終点まで行って帰ってくるだ  
けで。

C はあ、

リーディングしてから、動きに合わせて、台詞のタイ  
ミングや意味を確認していくワークショップでした。今回は、これを2人の人（1人はイギリス人、1人は日本人）  
に英語で翻訳してもらいその違いを比較してみました。が、  
時間がなくて十分な比較が出来ませんでした。今後、これ  
にイラストをつけて英語でワークショップの挑戦をして  
みたいと考えています。

（日本人）

\* A man (A) and a woman (B) are sitting  
opposite each other on a train

A: Actually I remember nothing about my

childhood, except that I survived a fire.

B: What!?

A: It was midnight... I saw my house on fire.

B: Oh really?

A: Yes... the cause was... I heard someone was  
making a fire on the ground and  
then the sparks spread to some  
dead grass.

B: That's scary.

A: Yeah. I don't know why but I remember only  
that moment. I was so scared.

\* Another woman (C) appears.

B: Was that scarier than an earthquake?

A: Ah... I was sleeping.

B: Oh, did I ask you before?

A: Uh-huh.

C: Ah... can I sit here?

\* B points at the next seat.

B: Yes, sure.

A: "Come over here" whispered A with a  
gesture.

B: "Oh" said B rising to her feet.

C: "Ah, no no, I'll sit here" said C sitting down.

B: "Oh, okay" said B still on her seat.

\* C opened a magazine and began to read it.

A: By the way, I saw a bat outside when the  
train entered the tunnel.

B: Wow.

A: I was about to tell you but you were sleeping.

B: I see.

A: Yep...

A: Are you traveling somewhere?

C: Yes... uh-huh...

A: Ah... actually we're traveling, too.

C: Oh.

A: Where are you going?



C: Well, I've no idea. I just decided to come this way.

A: Sounds good.

\* They all don't know what is good.

C: Yeah.

B: "Do you want some?" said B giving a mandarin to C.

C: No thank you.

B: Really. It's tasty.

C: No.

B: Ah okay.

C: So... where are you going, you guys?

A: Nowhere. We're just goin' all the way to the end of this line and going back home. That's it.

C: Hmm...

(イギリス人)

\* Sitting in a train, opposite each other, A and B.

A Man: Right. What I remember from my childhood is, there was a fire.

B Woman: You what?

A Man: In the middle of the night - our house caught fire.

B Woman: Really!

A Man: It was caused by a spark that flew out from the bonfire, and the fire spread to some dry grass.

B Woman: Wow, that's scary!

A Man: Yeah. I dunno, somehow I remember that. It was crazy/I was so scared!

\*C Woman 2 enters.

B Woman: More scary than that earthquake the other day, eh?

A Man: I slept through that./I was asleep at that time.

B Woman: Ah, I asked you that already.

A Man: Yeah.

C Woman 2: Er, can I?

Points to the seat next to the man]

\* Points to the seat next to Woman 1

B Woman 1: Here.

A Man: What about here?

B Woman 1: Er.

C Woman 2: It's ok. Here.

B Woman 1: Right.

C Woman 2: Excuse me (opens a magazine and starts reading)

B Woman 1: That's Ok.

A Man: Just as we were going through that tunnel just now, I looked out and saw a bat.

B Woman 1: Oh!

A Man: I was going to tell you, but you were asleep.

B Woman 1: What?

A Man: Yeah

A Man: Holiday, is it?

C Woman 2: Yeah, kind of.

A Man: Ah huh. Same here - a holiday.

C Woman 2: Ah.

A Man: Where to?

C Woman 2: I was just thinking of taking a look around this area.

A Man: Oh, that's nice.

The three didn't really know what to say.

C Woman 2: Huh um.

B Woman 1: Would you like some? (she shares the satsuma)

C Woman 2: No thank you.

B Woman 1: It's very good. Really.

C Woman 2: No, really.

B Woman 1: Ok.

C Woman 2: Er, how far are you going?/ Where are you going to?

A Man: We're not, really. We're just going to the end of the line and back again.

C Woman 2: Ah

## 研究発表 1

### 大学生のボランティア活動における英語使用事例

札幌大谷大学 准教授 石川 希美

#### はじめに

最近では、アルバイト先では英語でお客様に対応したとか、街中で外国人旅行者に道を尋ねられたなど、英語を使ったと話す学生が増えている。教室外で英語を使う機会は一般的な学生の日常としてはあまり多くないが、最近では思いがけず使うことになる状況がみられるようだ。本稿では、2017年2月に開催された冬季アジア札幌大会2017にボランティアとして参加した学生の英語使用事例について調査した。

#### 1. 冬季アジア札幌大会におけるボランティア

2017冬季アジア札幌大会は、アジアの30を超える国・地域が参加して、5競技11種別66種目が行われた。競技数、参加者数ともに冬季アジア大会としては過去最大の大会となった。その大きな大会運営に携わるボランティアは募集人数5,000名で、新千歳空港、選手・関係者ホテル、各競技会場、JR・地下鉄駅、コンベンションセンター（メディア）他といった場所での業務が予定されていた。言語にかかわる部分では、日本語ボランティアと多言語ボランティアという2つの区分で募集がされていた。大会ボランティア募集要項では「多言語対応ボランティアについては、英語、中国語、韓国語、ロシア語、アラビア語等アジア圏内で使用されている言語と日本語の2カ国語以上を話せる方。外国語を母国語とする場合は、日本語での日常会話に支障がなく、簡単な日本語の文章を読んで理解ができる方」という条件があった。

#### 2. 調査方法

札幌市内にある私立大学Aに通う学生に対して、当該の大会でのボランティア活動に参加した学生にアンケートに回答してもらった。回答者5名の中から、インタビュー調査への協力を了承した4

名にインタビューを実施した。その中から、比較的活動日数が多かった2名の学生の事例を取り上げることにした。

#### 3. 事例

2名の学生は、大会当時2年生の女子学生で、ともに日本語ボランティアとして活動に参加した。二人はこれまでも日常的にボランティア活動に従事していて、この大会での活動もボランティア活動に興味関心があってそれぞれ参加した。一方で、英語使用は多少あった（仕事全体の10%）と英語使用は多かった（80%）という対照的な回答が見られた。

2名の活動場所や英語を使用した相手などを対比すると表1の通りである。

表1 活動場所、英語使用相手

	多少の英語使用機会 (10%)	多くの英語使用機会 (80%)
活動場所	競技会場（誘導、VR体験ブース）	宿泊施設のロビー（インフォメーション・デスク）
従事者	①大会運営委員、②ボランティア	①大会運営委員、②宿泊・輸送担当（旅行会社）、③ボランティア
英語使用相手	観客	大会関係者（競技関連）

英語使用が多少であった学生は、観客にVR体験を呼びかけるなど、比較的短いやりとりだが、多数の対象者に同じ内容を繰り返し伝えていた。それに対して、英語使用が多かった学生は、大会期間滞在している人達とのやりとりのため、何度も顔を合わせる機会があった。そのため、大会関連や宿泊先等に関することに限らず、個人的な話をすることもあった。また、同じ場所で作業にあたっていた旅行会社社員がとても英語が堪能で、言い回しを教えていただくなど英語について適宜アドバイスをいただいていた。加えて、英語のことに限らず、分からないことはすぐ質問したり、助

けを求めることができた点は活動しやすい状況だったとわかる。

#### 4. 考察

この2名は、目の前にいる人に対応できるならと思いついて英語を使ってみたこと、そして多言語ボランティアに頼れなかったり、「若い学生さんは英語を勉強しているのだから」と周りから英語で対応することを期待されるなど様々な要因が相まって、結局英語を使う機会を複数回もつことになった。

英語の使用内容は、共通して「やりとり」が主で、案内、指示・注意、スモールトークといったものに分類される。英語の使用機会が多かった学生の場合、旅行会社の社員が働く人としてのロールモデル、そして英語の使い方やお客様への対応に関してアドバイスをしてくれるメンターの役割を果たしていたことはとても大きな意味を持って

いた。

#### 5. まとめ

アンケート調査では英語使用が0%という回答は見られなかったことから、今回のような国際的なイベントにおいては、日本語ボランティアとしての参加であっても英語を使う機会がある可能性があることがわかった。そして、比較的平易な表現でも相手とコミュニケーションが成立することによって、タスクの遂行につながることは明確である。対面でのやりとりのため、言葉が足りない場合でも、身振り手振りを交えて伝えられたようだ。それは自分のやる仕事ができたとということでもあるが、相手のニーズに応えられたというケースもある。このような成功体験が学習者の自信を生み、英語学習の意義を感じ、次の目標につながることを改めて認識させられた。

## 研究発表 2

### 地域との連携によるプロジェクト型英語教育の実践 ～高等学校「時事英語」の教材開発と発信活動～

北海道千歳高等学校 教諭 山崎 秀樹

本研究大会では、本校国際教養科の専門科目「時事英語」にて、Project-Based Learning(PBL)として実施した「千歳バーガープロジェクト」が、実用的な英語の学習と、英語を用いた発信活動にどのような効果をもたらすかを報告した。

このプロジェクトでは、新聞や映像等の各種メディア媒体を使用し、「グローバル」な視点で世界の「食」に関する 이슈を学び、協働プロジェクトを通して生徒が主体的かつ「ローカルに」活動することで、①言語運用能力(各種媒体の英語の理解、SNS等に英語で発信する工夫・改善、英語プレゼンテーション能力の向上等)に加え、②課題研究・協働学習・リサーチスキル・ITスキルの習得、③取材などの接遇や交渉など社会的スキルを向上させる効果があることがわかった。

この科目は、日本人教師と外国人指導助手(ALT)による授業が週2回(1回50分)あり、検定

教科書は使用しないため、授業内容の自由度が比較的高い。4月から7月までは、世界の「食」に関するトピックをウェブ上から集めて教材化した。扱ったトピックと教材は、1)食と健康: Fast food vs. Slow food(映画「Supersize Me」、ファストフードの広告研究)、2) Slow Food Movement(Slow Food ウェブページ)、3) Jamie Oliver の Food revolution(TED Award スピーチ 2011)、4) 世界遺産としての和食(BBC, CNN の映像と新聞記事)、5) 日本の給食(Washington Post)、6) Halal フード・ツーリズム(Japan Times)、7) Fair Trade, Organic Products、8) 食の志向 Vegetarian、Veganism などである。これらを提示しながら、ALT や日本人英語教員が解説し、生徒に議論をさせ、身近な食を再考させるなどして、リサーチ、啓蒙ポスター作成、英語エッセイ、プレゼンテーションを課した。英語を聞く、読む活動も多くあ

るが、ポスター作りや発表と共有など、書く、話す、表現する活動も必然と多くなった。また、生活習慣病や栄養素などの食と健康に関する語彙も増えた。

7月以降は、世界の食から地元の食と観光に目を向けさせ、学んだことを生かして地域に貢献する「千歳バーガープロジェクト」を生徒に提示した。平成26年度に千歳市内の農業、産業・商工会、市役所の有志が集まり立ち上げたご当地グルメ「千歳バーガー」は観光客はおろか、地元の人にも知られていないという現状がある。これを地元の人々、さらには国内外の観光客に知ってもらうにはどうすればよいのか、という正解のない課題に取り組んだ。そのねらいは、1)生徒が学んだ英語をもとに、観光客により伝わりやすい実用的な英語表現を工夫したり、SNSや広告に適した簡潔で印象に残るキャッチフレーズを考えたりする力を養う、2)取材などを通して社会人と接することで、ビジネスマナーや、接遇、説明や依頼の仕方などを学ぶこと、さらに、3)グループによる project-based の協働学習のため、生徒間の協働やアイデアの共有、役割分担などの運営能力を高め、リサーチ、IT関連技術、事後報告プレゼンテーションなどコミュニケーションスキルやソーシャルスキルを身につけさせること、である。

生徒は、既習の英語や世界の食文化や食に関する知識を応用し、「千歳バーガー」を特に近年増加している海外からの来道観光客に SNS で PR することにした。生徒は10グループに分かれ、全

24軒の千歳バーガー販売店に取材を申し込み、そこで得られた店舗やバーガー情報、シェフやオーナーのコメントをもとに、海外観光客向けに外国語版メニュー、SNS用の映像、広告のコンテンツを多言語のデジタルコンテンツにまとめ、Twitter, Facebook, Instagram など一般的に生徒が使用する SNS に加え、中国の大手サイト Weibo や韓国の Naver、世界の観光客の口コミサイト Trip Advisor などに多言語のレビューや広告を投稿して多くのリアクションを得た。その後、商品や千歳の観光地の情報と共に、リアクションの数やアクセスしてきた国やコメントをまとめて、本校の JICA 研修員訪問受入や、本校で行われた全道の英語教員の研究会で、英語による報告プレゼンテーションを行い、千歳バーガー協議会には日本語で成果報告会を実施した。また個人レポートとして、取材をした店舗やバーガーについて、SNS 発信によるリアクションをまとめさせた。

生徒はメディアの食に関する情報をオーセンティックな英語と共に学び、また生徒自身が SNS などで多言語で発信する際は、正確な外国語の表現を心掛けたり、発信前にネイティブチェックを受けるなど、責任ある発信の仕方と外国語の表現方法やマナーを学んだ。指導する立場からとしては、アクティブラーニング (AL) や、PBL のノウハウとシラバスを地域との信頼関係を持って構築できたことで、継続的かつ実践的なプロジェクトを企画・実施できるようになったことが成果である。

## 研究発表 3

### 地域と世界をつなぐ架け橋に ～公・民連携で広がる可能性～

石狩市立聚富中学校 教諭 櫻田 一平

今回の発表では、石狩市の聚富という地域に住む中学生が、地域や地元企業についての学習を行い、外国人に向けて地域を PR する活動を紹介した。昨年は新千歳空港でフィールドワークを行い、道内を観光した外国人と英語でやり取りを行った。地域を紹介するという明確な「目的」をもつことで、子どもにとって英語でコミュニケーションをとることが「意味」のある活動になり、英語がそ

れを達成するための「手段」となる。事後の活動として、石狩市企画経済部の協力のもと、修学旅行で訪問した有楽町さんこプラザでも石狩市の PR・地域の特産品の販売実習を行った。

#### 1. はじめに

石狩市立聚富小中学校は「小中併置校」、「小規模校」という特徴がある。各クラス2～5名

という環境の中、生徒たちは日々の学習に取り組んでいる。英語の授業については日頃から英語で教えること、子どもたちも英語で表現することを目標に進めている。また、英語の学習をどのような「目的」で行い、英語を使ってどのようなことができるのか、具体的な目標（ゴール・課題）を示すように心がけている。子どもたちの英語を「学びたい」という意欲を高め、実際に「運用したい」と思わせるためには多くの工夫が必要になる。外国語学習は単純に知識を増やすだけではなく、実際に運用する力・他者とコミュニケーションをとるための力として身に付けさせなければならない時代になっている。日々の授業を通して「skill（スキル）」としての英語運用能力育成を目指している。実践的に英語を活用して、外国人とコミュニケーションをするという体験をするため、新千歳空港での調査活動・石狩市のPR活動に取り組んだ。

## 2. 事前の指導について(藤女子大学との連携／石狩市企画経済部との連携)

### (1) 藤女子大学との連携

聚富に住む子どもにとって「地域」を客観的に見る機会や経験が少ないため、自分たちの生活環境の「良さ」を見つける学習から取り組んだ。子どもが考える地域の特徴は **negative** なイメージの強いものが多かった。そのため藤女子大学の学生と共に実施した「地域資源活用プロジェクト」を通して、自分たちのコミュニティの外にいる人たちから見た「地域の良さ」について学んだ。また、大学生の行うプレゼンテーションを聞き、資料の活用方法や地域をPRする方法についても考える機会となった。この学習を基に、石狩市をPRするための4つの視点（“Ishikari PR” 4 genres）を「Food」・「Nature」・「Activity」・「Event」に決定し、上級生が中心となって外国人向けの紹介文を作成した。既習事項・文法を活用し、シンプルでもわかりやすい文章の作成を心がけた。

### (2) 石狩市企画経済部との連携

空港フィールドワークで外国人に配付できるパンフレット（英語版）を提供していただいた。パンフレットは電子化もされており、外国人にPRする際にはiPadの画面を見せながら説明をすることができた。その他にも地元企業「佐藤水産」

への工場見学や「どさんこプラザ(東京有楽町店)」での販売実習のコーディネートも担当していただいた。連携をしたことにより、準備に関わるコストや時間を大幅に削減することができた。

## 3. 新千歳空港FWの取り組み

明確な目的意識をもって外国人観光客とコミュニケーション活動を行うため、小学生・中学生の目的を以下のように設定した。

### <小学校グループ>

- ・外国人とコミュニケーションを楽しむ
- ・公共の施設でのルールや社会性を身につける

### <中学校グループ>

- ・観光の目的について調査する
- ・石狩市を訪問してもらうためのPRを行う

中学1・2年生の4名が約90分の調査時間で、15名ほどの観光客とコミュニケーションをとることができた。調査日が2月28日と冬期間だったため、訪問者のほとんどがスキーやスノーボードを目的として来道していた。石狩市をPRする場面では、**Activity** に対する質問が最も多く、子どもたちが一番多くなるだろうと予想していた「**Food**」に興味をもつ観光客は少数派だった。

実際に調査活動・PR活動を通して、教室外で英語を使用した子どもたちは以下のような反省・感想をまとめている。

- ・想像以上に話を断られた。
- ・この時期に来ている人には「Activity」が人気だった。石狩と言えば「Food」だと予想して準備したけど、違う結果になった。
- ・普段使っている英語で話げできた。
- ・結構雑談ができた。
- ・日本を旅行しているのに、日本語が全然話せない人が多かった。
- ・思っていたより英語で話せることがわかったので、自信になった。来年もやりたい。

## 4. 事後の指導について(地元企業「佐藤水産」との連携／どさんこプラザ有楽町店との連携)

### (1) 地元企業「佐藤水産」との連携

英語の取り組みとしてスタートした「地域をPRする活動」の事後学習として、英語以外の方法で



も自分たちの住んでいる地域をPRできる方法について考えた。事前の学習からも子どもたちには地域についてもっと「知る」ための機会が必要だと判断し、地域学習や地元企業についての学習を設定した。前述した石狩市企画経済部の協力もあり、地元企業である「佐藤水産」での工場見学、販売体験学習に取り組んだ。子どもたちにとっては「地元にある企業」ということ以外、取り扱っている商品なども知らない状態から学習が始まった。

## (2) どさんこプラザ有楽町店との連携

地元企業が扱っている商品についての学習や製造工場の見学を経て、修学旅行の訪問先で販売実習に挑戦した。北海道を離れ、修学旅行で訪れた東京有楽町にある「どさんこプラザ」にて佐藤水産商品の販売と石狩市をPRするパンフレットの配布を行った。実習当日は平日の午前であるにも関わらず多くの人々が来店していた。事前に新聞社や佐藤水産の社外広報誌で本校の販売実習について紹介していただいたこともあり、2時間という短い時間ではあったが、普段よりも多くの商品を販売することに協力することができた。これらの

経験から「働く」ということの大変さ以上に、地域の良さを何とか伝えたいという「使命感」と地域のために自分たちが貢献しているのだという「やりがい」を子どもたちは感じる事ができた。

## 5. おわりに 「少人数だから」・「小中併置だから」 →「なぜなら聚富だから」

本校を取り巻く地理的環境は、特に冬期間において非常に厳しいものである。地域の「良さ」と言っても子どもたちにはイメージしにくいのが現状である。ただ誰かに「伝えたい」・「PRしたい」という目的をもちながら、改めて地域に目を向けて見ると多くの「発見」や「気づき」があるのも事実だ。子どもたちにとって生まれ育った自分たちの「故郷」に愛着をもち、中学生として地域のためにできること、誰かのためになることへの取り組みを続けていきたい。少人数だから、小中併置校だからといって「～ができない」という見方ではなく、「聚富だからできる」という学びの環境を整え、子どもと地域を、そして子どもと世界を繋ぐ学校としての役目を果たしていきたい。

# 第7回研究会 <特別講演>

## これからの英語教育—趣味が本業となった医師の目から—

札幌医科大学 医療人育成センター 教養英語研究部門 教授 木村 眞司

### <医学英語教育の試行錯誤…現場の英語で>

#### —失敗から学び、向上を目指す—

医師になるための勉強をする中で、大学4年生の時にアメリカ留学を志し、改めて医学を英語で猛勉強し直すことで英語が上達した。医師となつてから、アメリカでの医療現場を経験し、僻地医療で地域の役に立つという高校時代からの志も果たし、縁あって、母校の札幌医大の教養教育部門で英語を教えることになった。しかし、英語教育という新しい畑で良い実りを生み出すためには、「4技能」や「コーパス」といった英語教育の基本から、「セファール(CEFR)」といった新しい概念や外国語習得理論まで多くの勉強をしなければならなかった。中でも、白井恭弘さんの『英語教師のための第2言語習得論入門』は大変役に立った。

そんな新米英語教員としてのこれまでの苦労の中に、ご経験の長い皆さんにも参考になることがあるかもしれないと考え、その一部を共有させていただく。

大学での授業は、前任者に続いて「医学英語1b(リーディング)」の担当になった。色々と工夫や改革をしようとした。まず、次の2つのことを試みた。

1. 毎回、冒頭で小テストをし、すぐに自己採点させた。
2. 毎回、学生から無記名で授業に関してのフィードバックを書かせた。

その結果わかったこと。「リーディング」という授業の名前から、「読まなきゃいけない」ということに拘泥しすぎ、医療関係の英字新聞記事を読む



ことにしたが、学生からのフィードバックは、「ねむかった」、「tired, sleepy」など、不評の渦。他にも色々と傷つくフィードバックがあったが、この痛い経験を通して分かったことは、学生は「長文を読解することに飽き飽きしている。長文を読むことで、受験モードに直行してしまう」ということだった。

そこで、後期は、思い切って英字新聞や長文読解を中止した。それに伴い、教材はほぼすべて自分で作ることにした。また医学、看護、作業療法、理学療法の学生を担当することになったので、授業を徹底的にリアルにした。「リアルにする」というのは現場の話しを授業の中に取り入れるということである。現場の話しは、学生にとってもウケることが分かった。授業で寝ていた学生がニコニコしながら授業に参加し出した。具体的には、レントゲン写真を見ながら学生とやり取りしたり、骨の名前を英語で何というか教えたり、自分や家族、知人の医療体験を話させた。これは前述の白井氏の著書に「自分のことは感情が伴う記憶になるので、非常に勉強になる」とあったことを適用したものだ。さらに、私語対策・マンネリ化対策として、毎授業、席替えをし、3人のグループを作った。モチベーション向上のためにYouTubeやその他の動画を活用したり、TEDのリスニング、ゲストスピーカーを招くなど行い、自分に英語は必要ないと思っている学生の意識改革のために、国家試験問題の中の英語の問題を解かせたりもした。

#### <授業の流れ>

- 1 挨拶
- 2 前回の小テスト返却(出欠取りを兼ねる)、講評
- 3 小テスト、(席順の)くじ引き
- 4 答合わせ、自己採点させ、集める
- 5 3人グループで座らせる
- 6 先週のフィードバックを読み上げる
- 7 美唄の病院などで診た患者のことを英語で話す
- 8 当日の作業(会話文、聴き取り、国家試験問題等々)
  - ① 発音練習もするし会話練習もする
  - ② グループで取りくむ
- 9 宿題を配る
- 10 無記名フィードバックを書かせる

このように様々な試行錯誤の結果、後期の学生のフィードバックはどうだったか。代表的なフィードバックをまとめると、次のようになる。

#### 1. 医学生(1年、2年)のクラス:

- (1) 症例や医療関連の話題が良い。
- (2) グループ学習で、飽きることなく授業に取り組めたとし、話し合いながらより内容がわかりやすかった。

#### 2. 看護生、リハビリ生のクラス:

- (1) 将来の仕事に関連する分野の英語を興味をもって勉強できた。
- (2) 発音練習が良かった。

#### <これからの英語教育>

これまでの私の経験では、やはり、学生のモチベーションを保つことが最も重要で、モチベーションを持たせることを目標として、学生が「なぜ英語を勉強するのか」がわかる授業を作りだしていくことが必要だと感じている。そのためには色々な工夫が可能だと思うが、最近面白いと思ったことがある。

#### <これからの日本の第二言語習得>

小林朋道さんの『進化教育学入門—動物行動学から見た学習』には、「ヒトの学習は、生存、繁殖の成功に結びつくようにつくられている一つの性質である。」「われわれの脳は、現代においても狩猟採集生活の時代と同じ脳の特徴を備えている。」「ヒトの脳の構造や働きは、ヒト本来の環境のもとでの生存・繁殖がうまくいくように設計されている」とあった。

ここから言えることは、生存・生殖に関することを第二言語で学べば学習効果を高めることができるのではないかということである。最近では大学で教科内容と言語教育を統合する教え方が普及しつつあるようだ。数学などの科目に出てくるわかりやすい表現を英語で言えるように指導することも本来当然なすべきことだと思うが、性教育を英語で行うといった試みも学生のやる気を大いにそらせるかもしれない。また、言語を、生存・生殖とつながる男女の色恋沙汰といった文脈の中で教えたり、生存に直結する食に関連する話題をもっと取り入れたりすれば、学生の学ぶ意欲も自ずと高まるかもしれない。そういうことを小林さんの研究は示唆しているのではないかと考えている。

医大であれば、仕事はまさに生存、生死に関わるものだが、医師以外の仕事でも、それがうまくできなければ、生活の糧を得ることができなくなかなかねないという意味で、仕事というのは確かに“生きるか死ぬか”という問題に関わっている。だからこそ、仕事に直結した英語が大切であり、そういう英語が教材になれば、学生もやる気になるのではないだろうか。その意味で、これからの世の中に必要なのは《サバイバル第二言語》であり、サバイバルのために第二言語を学ぶという必要性が学生に伝われば、もっとやる気になってくれるのではないだろうか。今は、仕事なのに、自分の仕事に関わることを英語で話せなさ過ぎではないかと思う。たとえば、コンビニでは、海外の観光客に対応できていない店員がほとんどである。コンビニであれ、医療現場であれ、仕事関連の決まり文句ぐらいは多言語（英語、近隣諸国の中国語、韓国語、ロシア語など）で言えるような教育が必要なのではないかと思う。

#### ＜科学技術の《ガラパゴス化》に相当する、言語使用の《日本化》が進むのを食い止める＞

現実問題として、交通機関の社内アナウンスや表示は日本語だけでよいのか？東京の地下鉄の表示は英語・中国語の2か国語になっているが、札幌医大の受付窓口やその付近の案内板の表示は日本語だけ。せめて英語版を作る必要がある。今後は、通訳として観光客を案内するのに免許が要らなくなる！もっと多くの日本人、北海道人が、押し寄せる観光客に対応していけるようになるためにも、自分の町のことをいろんな言語で言えるようになることが必要ではないか。そういう切実な身の回りの必要や問題点に気付かせて、もっと外国語を学ばなければという気持ちにさせることも教える我々の責任ではないだろうか。

#### ＜入試の危機は大学の危機＞

「大学入試共通テスト」の英語科に関しては、民間検定試験を2020年から導入する計画になっているが、民間テスト導入のロジックは間違っているのではないかと思っていたが、阿部公彦さんの『史上最悪の英語政策—ウソだらけの「4技能」看板』を読んで確信が強まった。

様々な民間試験を受けられると言われているが、出てきた結果を評価する際に、異なる基準のテスト間の違いをどのように標準化してすべての受験

生に公平に評価するのだろうか？また、学習指導要領にあれほどこだわっていた文部科学省が学習指導要領に全く準拠していない試験を大学入試の一部として認めるとするのは、方針の一貫性を欠くのではないか。今後実施が予定されている入試形態には根本的な再考が必要なのではないかと思っている。大学入試で実施するテストは、大学が受け入れる学生たちの学びに大きく影響するので、英語教員としては、簡単に看過してはならない問題だ。

#### ＜まとめ＞

医学英語教育の試行錯誤の実態を皆さんと共有したが、これからも現場での失敗から学び、向上を目指していくということを繰り返していくしかない。

ただ、その際に忘れてはいけないことは、先ず第一に、これからの外国語としての第二言語習得は、生きていくための第二言語学習でなければならず、この第二言語習得の本質を、学ぶ者も教える者も、しっかり見極めていなければならない。第二には、我々は《ガラパゴス化》ならぬ《日本化》を避けなければならない。これからは、日本にいれば日本語だけ良いと言っていられる時代ではない。これからの日本は、いろんな言語の人々が来やすい社会になっていく必要があるという認識を持ち、そんな社会を作るために、日本の毎日の生活の隅々に英語やその他の言語を表示することが簡単にできるようにしたい。そのためにも、第二言語をしっかりと学ぶ必要があるということを忘れてはいけない。

第三に、入試の危機は大学の危機という認識を持って、今問題となっている大学入試における英語問題を見守り、積極的にかかわっていく必要がある。

NHKのラジオなどを聞きながら必死に英語を学んでいた若い頃は、教科書のつまらない英語にふれながら、こんなのを教えなければならない英語教師にだけはならないと思っていたが、こうして英語教師になってみて気づくことは、本当は私は英語が教えてみたかったのだなあということだ。これからも試行錯誤を重ねつつ、自分の教える学生が「英語教師にだけはなりたくない」と思わないような英語教育を提供していきたいと考えている。

## アクティブラーニングとしてのプロジェクト学習の可能性 —SPELT 主催で小中高大の一大連携プロジェクトを企画する—

発題者： 釣 晴彦（札幌学院大学）

パネリスト： 講演者及び発表者

司会： 久野寛之（札幌大谷大学）

平田オリザ氏が斎藤美奈子さんとの新春対談（道新1月3日朝刊）で言及した「村を育てる教育」に倣って、「村を育てる英語教育」という観点から、学校での英語教育が地域での《実用》に貢献できるものになるためには果たしてどんな道があるのかを考えた。そのための提案として、「村」に観光資源があり、そこへ外国人がやって来るから英語を学習することに意味がある、というような短絡的な発想から一旦脱却し、「村」の住人が英語を学ぶ意義を一から考え直してみよう。国が決めたから学ぶというのではなく、自分たちの「村」にとって英語を学ぶ意味は何かを考え直してみよう。それが、自分たちの「村」を再発見することにつながり、そこから希望のある「村」づくりが始まるのではないだろうか。そんな思いから、実現可能かつ持続可能な活動として具体化したものが、北海道を訪れる外国人のための「北海道言語マップ制作プロジェクト」である。

### 「北海道言語マップ制作プロジェクト」

#### 1. 概要と期待される効果

もし外国人が北海道のどこかを旅行中病気にかかったり、ケガをしたら、何語話者であれ、恐らく世界共通語の英語を使って Google 検索するだろう。しかし、残念ながら、北海道で英語のできる医者を特定し、連絡を取ることは、ホテルのような宿泊施設にでも宿泊していない限り不可能に近い。だから、北海道のどこに何語のできる医者があるかがネット検索で即座にわかるようなデータベースがあれば、北海道は、外国人が安心して旅行できる場所とし

て知られることになり、結果的に、訪れる人々の数も増えるに違いない。そこで、北海道中の小中高大の外国語学習者に協力を呼びかけ、自分の地域のあちこちを訪問して、どこにどんな外国語が話せる人がいるかを調査してもらい、全道各地の子どもたちが足で稼いだデータを SPELT の有志がまとめ、デジタルマップ化技術を持つボランティア企業の協力を得ながら、Wikipedia のような情報データベースを作り上げていこうという遠大な計画を提案した。勿論、医療機関や日用必需品が手に入るコンビニのような店舗の情報だけではない。外国人訪問者は、他にどんなモノやサービスが自分の言語で入手可能だとわかったときに、安心と関心を持ってその地域を訪れてくれるだろうか。この質問に答えることを通して、子どもたちが自分の地域の特徴や魅力、ニーズや課題を見つけ出し、それによって自分の「村」に対する理解が深まっていく。また、子どもたちの気づきを、教員が仲立ちとなって、異校種間で、また、学校と地域の大人との間で共有することで、英語を学ぶことが単に子どもたちの“お勉強”であるだけにとどまらず、それまで英語学習とは関係がないと思っていた大人の課題としても認識されて、地域のリカレント英語教育へと自然につながっていくことになるかもしれない。

#### 2. 具体的な活動

小学校から大学まで、全てのレベルの子どもたちにまず次のことを考えてもらう。(1) もし外国に行くとしたら、何を求めて、どんな国に行きたいか。(2) その国のあちこちを旅して回る

とき、どんなことが心配や不安の種か、(3) どのなところに日本語の話せる人がいると安心か。(4) 是非また来たいと思えるための条件は何か、など。そして、これらの間に答えたのち、もし自分が外国人として自分のまちを訪れるとしたら、どのなところに英語のできる人がいてほしいと思うかを考え、調査すべき場所（機関や事業所。以下「調査ポイント」）を決める。

（以下は、その後の初期活動例）

●小学生は、英語その他の外国語がその調査ポイントで使えるかどうか、あるいは、商品等の表示に使用されているかどうかだけを調べる。  
⇒小学生は、調べた結果を中学生に渡す。

●中学生は、①小学生から、〇〇語が使えると報告を受けた調査ポイントに出向き、具体的に〇〇語でどんなことが行われているのか、また、行われうるのかを調べる。⇒②調べた結果を小学生と共有する。③調べた結果を高校生と共有し、それで十分かどうかを一緒にチェックする。もし不十分であったり、間違ったりしていた場合、高校生と一緒にそれを報告書の形にまとめ、出向いて調査した場所の人たちと共有する。

●地元で大学がある場合、大学生は、高校生と一緒に、地域のニーズに応じて、英語その他の外国語への対応能力がゼロ又は不十分な調査ポイントのための支援を行う（例：英語メニューの作成、英会話講座の実施など）。

### 3. パネリスト及びフロアの反応

パネリスト及びフロアからの指摘やコメントと、それに対する提案者の応答をまとめると次のようになる。

(1) ユニークでおもしろく、意義のある活動だと思し、実現可能でもある。ただ、SPELTとしてどこまでどのように関与するか、詰めなければならない点が沢山ある。

(2) 小中高の連携を日常的に作り出すのはなかなか難しい課題だと思うが、実現できれば素

晴らしいことだ。また、道内の高校ではすでに同様の調査や活動を行っているところがあるので、まずは、そういう既存の活動成果をまとめていくところから始めてはどうだろう。

(3) 収集した情報をネット上で公開すると、情報が間違っていた場合の責任は誰がとるのかという問題があるが、Wikipediaのように、それは利用者の自己責任でということ宣言しておけば大丈夫ではないか。

(4) バイトで働いていた人がたまたま英語ができたので「ここは英語で買い物ができる」と表示されるようになっていても、バイトの人が辞めた途端に表示が間違いになってしまう。こういうことが結構頻繁に起こるのではないかという懸念はあるが、だからこそ、毎年毎年、調査を継続して行く理由が存在する。1回で終わってしまうのではなく、持続可能なプロジェクトとして継続して行える活動である。

(5) 一番気をつけたいのは、「あそこは英語ができないから駄目だ」というようなマイナスのレッテル貼りになってしまわないように、調査方法やアプローチについて、実施する前によく練る必要があるのではないか。

### 4. 今後の方向性

あまりにユニークで遠大な計画なので、総論賛成、各論で足踏み、というのがフォーラム参加者の概ねの反応だったと言える。しかし、有益な意見が活発に交わされ、「まず私たちから始めましょう」と申し出てくださる高校も現れた。当面は、提案者の札幌学院大学の釣教授と札幌大谷大学の久野教授が音頭を取って、パイロットプログラムとして小規模に始めていくことになるだろう。関心のある方は、実用英語教育学会の事務局 ([info@spelt.main.jp](mailto:info@spelt.main.jp)) を通すか、ぜひお二人と直接連絡を取ってみてください。

釣晴彦 [tsuri@sgu.ac.jp](mailto:tsuri@sgu.ac.jp)

久野寛之 [hiroyuki\\_kuno@sapporo-otani.ac.jp](mailto:hiroyuki_kuno@sapporo-otani.ac.jp)

# シリーズ 小学校からはじまる実用英語教育

久野寛之 (札幌大谷大学 教授)

## 第12回 「ほめる・頼む・感謝する・同情する」—その(3) 同情する

“How are you?” 会話を上手にできるということとは?

“How are you doing?”—“I’m fine, and you?”—“I’m fine, too. Thank you.” このやりとりが「変だ」、「ネイティブはこんな言い方をしない!」などと騒がれたことが昔あったように思いますが、アメリカの大学で2年、小学校で9年間働いた経験から言うと、特に「変だ」とは思えません。ただ、日常生活でこのやりとりが起こるのは大抵すれ違いざまです。すれ違いざまにこんな悠長なやりとりをすることはめったにないという意味で「変だ」と言うネイティブがいてもおかしくないと思います。

アメリカに何年いても、住む場所によって言語習慣は様々なので、何年居ようが、簡単に「アメリカではこう言う」と断言はできません。私が大学院生助手として2年間を過ごしたジョージア州南西部の田舎町 Americus は人口が2万人足らず。その町では、路上で対向車とすれ違おうと、見知らぬドライバーがハンドルを握る片手の指をちょっと上に挙げ、“Hi!” の合図をしてくれます(下の写真)。こっちは、「えっ、あの人誰だっけ?」とドキッとするくらいです。また、朝散歩していると、道路の反対側を歩いてくる人が5m以上も離れた向こう側から“Good morning.” と声をかけてきます。人種差別が



ハンドルに手を置きながら指を上げるのが handwaving (手を振ること) の代わりになります。

- 第1回: ○と×
- 第2回: 数と数字
- 第3回: アルファベット
- 第4回: “Nice to meet you.” と “Good to see you.”
- 第5回: “Excuse me.” と “I’m sorry.”
- 第6回: “Sir” と “Ma’am”
- 第7回: “Uh-huh” ・ “Uh-uh” ・ “Uh-oh”
- 第8回: “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (1)
- 第9回: “Yes” は “Yes”, “No” は “No” (2)
- 第10回: ほめる
- 第11回: 頼む・感謝する
- 第12回: 同情する**
- 第13回: 誘う

云々されるアメリカ南部ですが、相手が誰であっても、表向き、挨拶だけはきちんとするよう習慣づけられているように思えました。田舎の礼儀作法は普遍的なのでしょうか、私の生まれ育った滋賀の田舎で「近所ですれ違う人にはこうせよ」と教え込まれた礼儀作法と全く同じでした。それはともかく、そんな田舎町にある大学のキャンパスですから、すれ違いざまに笑顔で “Hi, how’re you doing?” と声をかけられることは日常茶飯事。ところが、暮らし始めて間もない頃は、そんなふうに声をかけられても、答が私の口について出る頃には相手はすでに後方に歩き去っていて、振り返りながら返事を終えるという始末でした。だから、意図的に素早く “Fine, and you?” と返答できるよう努力したのを覚えています。でも、大学院が終わって、小学校で教えるようになってからは、この努力が必要なのは、何も外国人に限ったことではないんだということに気がつきました。廊下で私とすれ違おうときに、すれ違う 4, 5メートル先から、もうすでに “Fine!” と言いながら



歩いてくる同僚がいたのです。そうです。こちらが“*How are you doing?*”と言う前にです！ネイティブでも、すれ違いざまにこのやりとりを完了するには時間がかかるものなんでしょう。そして、このような経験をしながら、私たちが《英会話》なるものを学ぶとき、いかに文脈や場面というものに注意を払わずにいたかと、大いに反省させられたものです。

## 問題は、元気じゃない時にやってくる！

ところで、前節で私が言いたかったことは、「“*How are you?*” 会話」が上手にできるということ、その会話のやり取りを瞬時に完了できるようになることだ」というものではありません。また、「言語は、それがどんな場面や文脈の中で発せられるかをよく考えて教えなくちゃいけませんよね」ということでもありません。《“*How are you?*” 会話》というのが、日常的にはすれ違いざまに起こることが多いということは、確かにわかっていた方がよいには違いありませんが、それほど決定的に重要なことだとは言えないでしょう。だって、それ以外の文脈や場面でも起こりうるやり取りですから。また、日本では、この《「元気？」-「うん、元気」》会話を、意味も考えずにそのまま丸覚えする御仁も多いらしく、そのため、「日本人は、具合が悪くて医者に行っても、診察室で“*How are you doing, sir?*”と聞かれると、いつも“*I'm fine, thank you.*”と答えるんだって？」と茶化されたことがあるくらいです。だから「自分が元気じゃないときは、ちゃんと『調子が悪い』と、本当のことを伝えられるように教えましょう」と言いたいわけでもありません。事実や文脈に応じて、単なる丸覚えではなく、ちゃんと意味を考え、その意味を伝えられるように指導することは大事ですが、そんなことは、小学校から訓練しなくても、中高で訓練すれば十分間に合うことだと思っています。

小学校から少しずつ練習していくのが大事ではないかと言いたかったのは、相手が型通りの「元気です」ではなく、「元気じゃない」と言ってきた時の対応の仕方なのです。

## 元気じゃない相手に何と言いますか？

私が教えている大学生の様子を見ると、毎回のいわゆる帯活動で行う *small talk* の練習の中で、“*Not too good.*”とか“*I'm not doing very well*



*today.*”など、「元気じゃない」という答が返ってきた場合に、瞬時に適切な応答ができない学生があまりに多いのです。そして、その応答ができるようにするのが一筋縄

ではいかないのです。“*Sorry about that.*”と言えばいいだけだと、いやもっと簡単に、“*Sorry.*”と言言言えばいいだけだよと教えるのですが、なかなかその一言が口をついて出て来ない学生が少なくありません。このシリーズの第5回目（第3巻第1号）の記事の中に「直訳の代償—“*I'm sorry.*”の場合」という小見出しで書いたことなのですが、“*Sorry*”には、「ごめんなさい」や「すみません」のほかにも、「残念だ」、「気の毒に」、「かわいそう」という意味もあるということも教えても、一旦頭の中で“*Sorry*”=「ごめんなさい」の等式が完成してしまうと、その結びつきを消去するのは大変な作業なのです。私が今教えている社会学部の学生だけではありません。看護学科の大学生を何年か教えました。調子の悪い患者さんに「それは大変ですね」と同情したり、患者さんが亡くなられたご遺族に「心からお悔やみ申し上げます」という気持ちをことばで表現するのに、“*I'm sorry.*”という馴染み深い表現を使うだけでいいのだと教えても、テストで問われると正しく答えられない学生が結構いました。大事な表現が定着しないような教え方をしていた私に責任があるのは言うまでもありませんが、だからこそ、小学校の頃から少しずつ、みんなで注意して教えていけば、たとえ私みたいに教え方のへたくそな教師に習っても、そのおかげで子どもたちが人間関係上大事な表現を覚え損ねるということを避けることができます。

ただ、どんなに教え方の上手な先生に習ったとしても、やはり我々日本人が「ごめんなさい」ではない“*Sorry*”を習得するのは大変なのです。“*Sorry*”=「ごめんなさい」と覚えてしまう可能性に加え、日英の言語習慣の違いも問題だからです。日本語では、「どう、きょうの調子は？」と聞いた相手から「いやあ、あんまよくないんだよねえ…」と言われたら、恐らく「どうしたの？」とか「大丈夫？」と聞き返すのが普通ではないでしょうか。「そりゃあ、大変だね」とか「そりゃ、気の毒に」というような言い方をするのは日本語的なやり取りではないと思います。このような文脈レベルでの



言語習慣の違いも、「元気じゃない」とわかった相手に英語で何と言うかという問題を一筋縄では行かない問題にしていると思われまます。

## 便利な“Sorry”が使えるようにするには

「同情」をことばで表現できるということは、人間関係を築いたり、維持したりするうえで大変重要です。それを“Sorry”という短い表現で実現できるなら、その便利な表現に小学校から馴染ませてあげることが大切であることは言うまでもありません。前回第5回目の連載記事では、“Sorry.”という表現に、日本語の「ごめんなさい」と「残念だったね」という2つの概念が結びついていることを理解させ、適切な場面で自然に口をついて出てくるようにするための方法として、その音声表現と意味・概念とを「直訳」式で無理やり結び付けさせようとせず、「ごめんなさい」と謝罪する場面と、「残念(だった)ね」と同情の念を表す場面をともに沢山経験させることを提案しました。そのためには、授業の一環としてのクイズやゲームの中で年がら年中使うことです。クイズの答えがハズレだった時には“(I’m) sorry, (but) no!”(残念ながら答えは外れ!), あるチームがゲームで負けた時には“Oh, no. (I’m) sorry.”(あっちゃあ! 残念だったねえ。)と言って、何度も子どもたちに聞かせてあげることです。



さて、子どもたちがこの便利でお手軽な“Sorry”が使えるようになるために小学校でできることというのは、い

ま上で述べた通りです。ただ、これは第5回の連載記事ですでに書いたことです。そこで今回は、つい先ほど述べたように、「言語は、それがどんな場面や文脈の中で発せられるかをよく考えて教えずにちゃいけません」から、実際にゲームをして、負けた子どもたちに“Sorry.”を使うとどんなふうになるのか、最後にそれを見ておきましょう。実はそこに、子どもたちに理屈抜きで覚えてほしい、ある大事な表現も含まれています。ぜひ一緒に考えてみてください。

## ゲームという文脈で教えられることとは?

ゲームをするときの一連の流れを考えてみます。仮に、形(shapes)を使ったゲームをします。色々な形(正方形(square)・長方形(rectangle)・丸(circle)・卵型(oval)・三角形(triangle)・ハート形(heart)・星形(star)・ひし形(diamond)の8種くらい)の紙を数枚ずつ、全部でクラスの生徒数と同じになるくらいの数だけ教室内に配置します。2チームずつ対抗で、片方が“(Get) two circles and one square!”のように指示を出すと、もう片方は全員で教室内を駆け回って言われた形を言われた数だけ集め、所要時間を競います。全チームが終わったら、黒板に記録された各グループの所要時間の合計を先生が確認。“Group #1 (took) 34 seconds. Group #2, 30 seconds. Group #3, 38 seconds. ...So, **Group #2 wins!** Give them a big hand! I’m sorry, Group #1. I’m sorry, Group #3...Would you like to try again?”(1班は34秒かかったね。2班は30秒、3班は38秒...。てことで、2班の勝ち! 2班に拍手を! 1班、残念だったね。2班、残念だったね。3班...もう一度やるか?)のように流れていくと思います。

### I win! か I won! か?

「2班の勝ち!」は“Group #2, **you win!**”です。“Group #2, **you won!**”のように過去形は使いません。“Group #2, **you have won!**”も勝った瞬間の感動は表せません。勝った直後に2班が上げる勝ちどきは“**We win!**”。個人戦なら“**I win!**”で“**I won!**”



ではありません。なぜ? 中高生にはかなり難しい説明になるでしょう。でも、小学生なら、「勝った瞬間に言

う表現」という文脈の中で覚えてしまいます。小学校では、理屈で教えるのではなく、この《文脈の中で覚えてしまう》ほど楽しい体験を積み重ねていくことが大切です。子どもたちが、理屈がなくても意味や使い方を自然に憶えていってくれる活動を小学校から積み上げていきたいものです。

## お知らせ

### ◆会員募集について

実用英語教育学会では、新会員を募集しております。年会費は4,000円です。会員の皆様は、研究会や大会の参加費が無料になるほか、口頭発表および論文発表の発表資格を得ることができます。

### ◆研究紀要の発行について

実用英語教育学会では研究紀要（年1回発行、査読付き、ISSN取得）を発行しております。投稿につきましては、「SPELT JOURNAL 投稿規定」をご覧ください。投稿者資格として本学会の会員であることが規定されておりますので、まだ会員になられていない方は事前に入会手続きをお済ませください。ご質問がございましたら、事務局までお問い合わせください。

なお、投稿の申し込みの締切は8月末日となっております。皆様の投稿をお待ちしております。

## 編集後記

編集後記にかえて、研究会、および研究大会についてのアンケートに寄せられましたご意見の一部をご紹介します。まず、SPELTに関して「特徴のある学会だと思います」というご意見をいただいております。いつもテーマを決めて、それに沿った内容の発表をさせていただいていることに対して、参加者の皆様が満足して下さっているとしましたら、運営側としても嬉しい限りです。また、同じテーマでも校種を替えてご発表いただくことで、見えてくる気づきがあるように思います。第7回研究大会にてご講演くださった木村眞司先生は、医師という異業種から英語教員に転身されるまでの経緯、英語教員になってから模索された試行錯誤の日々をユーモアたっぷりにお話しされ、参加者の方々から大変好評でした。今後、研究会で取り上げて欲しいテーマにつきましては、以前ご好評をいただいたボイストレーナーによる発音指導や、ルーブリック評価のワークショップの再企画を希望する声がありました。今後も、参加してよかったと思っただけのような企画を考えてまいりたいと思っております。これまでご参加くださったことのある先生方は、ぜひお知り合いの方々をお誘いの上、またご参加くださいませ。また、新規のご参加もお待ちしております。ニュースレターが皆様とSPELTを繋ぐ助けとなれば幸いです。



#### 実用英語教育学会

編集：SPELT Newsletter 編集委員

(石川希美・久野寛之・三浦寛子・杉浦理恵)

発行：2018年3月30日

事務局：〒065-8567 札幌市東区北16条東9丁目1番1号

札幌大谷大学社会学部地域社会学科 石川希美 研究室内

TEL: 011-742-1969 (直) Fax: 011-742-1654 (代)

Email: info@spelt.main.jp ※◎を@に変更してください。